

あいち病害虫情報 最新情報

令和2年11月17日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

気温が高くなる見込み

名古屋地方気象台11月12日発表の1か月予報によると、期間の前半は気温がかなり高くなると予想されています。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目高い確率80%、2週目高い確率70%です。

キャベツ、ハクサイの害虫

キャベツ、ハクサイのフェロモントラップにおけるコナガの誘殺数はおおむね平年並ですが、やや多い地域があります。11月上旬のハクサイほ場の巡回調査では、発生量は平年並の状況でした。この時期に発生量が多いと、翌春も発生が多くなる傾向にあるため、ほ場での発生状況に注意して、今のうちに防除しましょう。コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避けましょう。また、周辺ほ場への発生源とならないよう、収穫終了後は、残渣を速やかにすき込みましょう。

野菜のフェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺数はやや多い状況が続いています。11月上旬のハクサイほ場の巡回調査でも、発生量の多い地域がありました。今後も気温は平年に比べ高く推移する見込みなので、引き続き、ほ場での発生状況に注意し、防除を実施しましょう。

キャベツ、ハクサイの病害

菌核病が発生する時期です。発病株は直ちに抜き取ってほ場外に持ち出し、適切に処分しましょう。なお、本病の病原菌は多くの種類の植物に感染します。菌核病が発生している地域では、他作物での発生にも注意しましょう。

果菜類の病害

トマトすすかび病やナスすす斑病の発生に引き続き注意しましょう。

果菜類の灰色かび病やトマト葉かび病、ナスすすかび病は、施設を密閉し施設内の湿度が高まる11月中下旬頃から発生が多くなります。積極的に換気や送風を行って、多湿にならないようにしましょう。また、発病部位は速やかに取り除き、適切に処分しましょう。

トマトでは、草勢が衰えると、葉かび病の発生が助長されます。生育に応じた肥培管理に努めましょう。葉かび病抵抗性品種を栽培している場合も、すすかび病は発生します。両病害とも発生初期の防除を心がけましょう。

イチゴの病害虫

ハダニ類は、多発すると防除が難しくなります。ハダニ類の防除では、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選定しましょう。気門封鎖型農薬を積極的に活用し、同一系統薬剤の連用を避けて防除しましょう。天敵を利用する場合は、導入前に薬剤で防除し、ハダニ類の密度を下げてから放飼しましょう。

炭疽病は、10月下旬の巡回調査で発生量がやや多い状況でした。発病株や隣接する株は速やかに抜き取って、ほ場外に持ち出し、適切に処分しましょう。

うどんこ病は、多発すると防除が難しくなるので、初期防除に努めましょう。また、窒素過多は発生を助長するので、適切に肥培管理しましょう。

トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、キュウリ黄化えそ病

トマト黄化葉巻病の病原ウイルス（TYLCV）は、タバココナジラミ、トマト黄化病の病原ウイルス（ToCV）はコナジラミ類、キュウリ黄化えそ病の病原ウイルス（MYSV）は、ミナミキイロアザミウマにより媒介されます。

10月下旬のトマトにおける巡回調査では、コナジラミ類とトマト黄化葉巻病がともにやや多い発生量でした。

媒介昆虫の防除を徹底するとともに、発病株は抜き取り、適切に処分しましょう。コナジラミ類については、11月2日発表の「コナジラミ類情報第1号（トマト）」を参考にしてください。

水田の秋冬期耕うんを行いましょ

イネ白葉枯病の病原菌は、被害わらやもみで越冬し、次作の発生源となります。スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）は、本田や用排水路で越冬します。また、イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカは、水田畦畔の雑草やひこばえで越冬します。

越冬量を減らすため、収穫後の耕うんを始めとする、秋冬期管理を実施しましょう。

詳細については、本日発表の「水稻の秋冬期管理情報第1号（イネ白葉枯病、イネ縞葉枯病、スクミリンゴガイ）」を参考にしてください。

予察灯、フェロモントラップなどの各種調査データは、ホームページ「あいち病害虫情報」（アドレス：<https://www.pref.aichi.jp/site/byogaichu/index.html>）を参照してください。

問合せ先 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室
TEL 0561-62-0085 内線471 FAX 0561-63-7820